

翁久允と吉井勇・川田順一富山を訪れた歌人たち

[展示期間]	前期第1期	令和2年6月19日(金) — 9月14日(月)
	前期第2期	令和2年9月16日(水) — 12月28日(月)
	後期第1期	令和3年1月4日(月) — 4月5日(月)
	後期第2期	令和3年4月7日(火) — 6月下旬

※上記期間ごとに展示替えを行います

現在、高志の国文学館では、公益財団法人翁久允財団の協力を得て、翁久允旧蔵資料の調査を行っています。今回は、その調査報告の一環として、翁久允と、富山歌壇に大きな影響を与えた二人の歌人—吉井勇と川田順一の親交を伝える資料を紹介します。

翁久允おきなきゆういん(1888~1973)は、現在の立山町出身の小説家・ジャーナリストです。アメリカで約18年を過ごし、帰国して『週刊朝日』の編集に携わった後、昭和11年(1936)に富山で郷土誌『高志人』を創刊、生涯を通じて刊行を続けました。

吉井勇(1886~1960)と川田順(1882~1966)は、戦時中、雑誌統合により『高志人』が『高志』と改称して刊行された時期を中心に、短歌や文章を寄稿しました。その背景には、小又幸井こまたきうい(1900~1990)や藻谷銀河もだに(1900~1945)をはじめとした富山の歌人たち、そして翁久允との交友がありました。

吉井勇は、昭和19年(1944)に初めて富山を訪れました。富山へ旅したばかりでなく、川崎順二、小谷契月らの支えを得て、昭和20年(1945)2月から8か月間、八尾に疎開しました。富山での詠草は、歌集『寒行』、『流離抄』に収められています。

川田順は、昭和10年(1935)7月、小又幸井らと立山に登り、「立山行」54首を発表し、歌集『鷺』に収めました。昭和18年(1943)には、大川寺公園に「鷺の歌」の歌碑が建立されています。その後、戦前戦後を通じて小又幸井、翁久允らとの交友は続きました。

今回の展示では、期間を前後期に分け、前期は吉井勇、後期は川田順を中心とした構成とし、翁久允に宛てた書簡や、原稿、掲載誌、歌集などを展示します。あわせて、『高志人』という場を介した、富山の歌人たちとの関わりについて紹介します。

展示資料一覧

番号	展示期間	種別	作者名	資料名	備考	所蔵
1	後期-1 後期-2	雑誌		『高志人』第31巻第8号(昭和41年8月)	翁久允「過去帳 立山の歌「鷺」川田順(85)」を掲載。昭和41年(1966)1月22日に川田順が逝去した後、翁久允が思い出をつづった文章。川田順と富山とのゆかりは、翁久允よりも早く、小又幸井が、昭和10年(1935)7月26日~31日の日程で、川田の立山登山の案内をしている。歌集『鷺』は、この時の「立山行」54首を収める。また、藻谷銀河も川田とは交流があり、昭和17年10月5日~8日の川田の来富について、翁は藻谷から聞いたとあり、この時が初対面であったという。昭和18年7月、川田の歌碑が大川寺公園(後に大山文化会館に移設)に建立され、川田は除幕式に出席している。歌碑には『鷺』所収の「山空を一すぢにゆく大鷺の翼の張りの澄みも澄みたる」が刻まれた。川田は『高志人』及び『高志』に、昭和10年代から昭和22年頃までしばしば寄稿し、その後、数は少なくなるものの昭和30年代まで寄稿している。翁久允旧蔵資料における翁宛ての書簡は、戦前戦後を通じて多数残されており、『高志人』及び富山県歌壇に対するよき理解者であった。	翁久允旧蔵(個人蔵)

番号	展示期間	種別	作者名	資料名	備考	所蔵
2	後期-1 後期-2	書籍	川田順	『鷺』(創元社、昭和15年)	「立山行」54首を収める	当館蔵
3	後期-1 後期-2	雑誌	-	『富山県歌壇総覧 富山県歌人』第25号(富山県歌人連盟、昭和61年3月)	川田順の昭和10年の立山登山、昭和18年の歌碑建立の折の写真を掲載する。昭和10年に川田を立山登山に案内した小又幸井は、初代富山県歌人連盟会長を務めた。	当館蔵
4	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛封書「拝啓 京都宛御状」(昭和18年4月28日消印)	便箋2枚(ペン書き)、封筒1枚(墨筆)。速達。差出「東京市麹町区(略)株式会社住友本社東京支店 川田順」、宛先「富山市桜通電気ビル内 高志人社 翁久允様」。川田順の歌碑建立に際してのやりとりの一端がうかがわれる書簡。川田は、「鷺」の歌であれば、「立山の鷺」であることが詞書による説明やルビなどなくてもすぐにわかる歌でなければならぬだろうとして、「立山に棲むとは聞きし大鷺のまなかひにして飛び立つを見き」を候補に挙げている。また、当初の候補であった「立山はあらか岩山」の歌でもよいとしている。相談の結果、歌碑には「山空を」の歌が刻まれた。歌碑建立の経緯は、小又幸井「立山歌碑譚」(『高志人』第8巻第8号、昭和18年8月)に詳しく、本書簡は歌碑に刻む歌の選定に関する小又の文章と矛盾のない内容である。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
5	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「拝啓 吉井勇君に」(昭和18年8月4日消印)	宛先墨筆、差出・本文ペン書き。差出「京都市北白川(略) 川田順」、宛先「東京都大森区調布鶴ノ木(略) 翁久允様」。吉井勇から、翁久允が8月16、17日頃京都へ来ると聞いたので、一タ捨てたいから予定を知らせてほしいと記す。また、初孫ができたので自分も「翁」になったと記している。なお、翁久允が実際に京都を訪ねたのは10月5日で、「鶴屋」にて翁、川田、吉井、石崎光瑤の4人で会食した(翁久允「愛國歌人川田順先生を訪ふ」『高志人』第8巻第11号、昭和18年11月)。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
6	後期-1 後期-2	書簡	川田順	翁久允宛封書「寄翁久允学兄」(昭和20年7月23日消印)	便箋1枚、封筒1枚。墨筆。速達。差出は北白川。宛先は、貼付の転居票に「五百石町」とある。戦争末期に届けられた書簡。翁久允に寄せる短歌三首「亞米利加も印度も見たる君なればいまの戦争の行方を知らむ」、「亞米利加ゆ歸らふ途にみほとけの足跡たどり泣きし君かも」、「高志の国を狭しと思ふなこの時ぞふるさと人のために筆執れ」が記されている。アメリカとインドを実際に見てきた翁には戦争の行方は見えているだろう、この時だからこそ「ふるさと人のために筆執れ」と激励する内容。『高志』は昭和20年6月を最後に、刊行を停止していた。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
7	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「御懇書 拝讀市中より」(昭和20年7月31日消印)	宛先・署名墨筆、差出住所・本文ペン書き。差出は北白川。宛先は「中新川郡新川村沢端」。翁の疎開先について、立山の山麓はかえって安全だろうと記し、自らは、京都北白川の地に留まると記す。本文に「『高志』当分ゆつくり、何事も白雲と共に悠々の外無候、本日丹波やられたらしく小生の新歌集「吉野之落葉」も大方灰とあきらめ申候」とある。時局のため『高志』が刊行できなくなった翁を気遣う。翁は、東京の自宅から、3月末に滑川、4月に雄山町沢新、6月中旬に沢端へと疎開先を移った。なお、川田の原稿は空襲を免れ、『吉野之落葉』は昭和20年8月、奈良県丹波市町の養徳社から刊行された。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
8	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「玉葉拜受全く御同感」(昭和20年8月26日消印)	宛先・署名墨筆、差出住所・本文ペン書き。北白川より、沢端宛。「只、不心得の者多くして、歴史を汚したること、くれぐれも悲痛に不堪候。ミロク菩薩の出現、日本人の出直し、先づこの外は無之候」と終戦の感慨を記す。また、8月2日未明の富山空襲で負傷し落命した藻谷銀河について、追悼会の計画があれば知らせてほしいと記す。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
9	後期-1 後期-2	雑誌	-	『高志人』第11巻第1号(昭和21年2月)	復刊号第1号。表紙に、川田順「新興藝術」を掲載。	当館蔵

10	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「拝復御状縷々忝く」(昭和21年9月21日消印)	宛先墨筆、差出本文ペン書き。差出は北白川。宛先は「富山市荒町高志人社」。藻谷銀河の法要が10月13日に執り行われるとの知らせに対し、参列したいが北陸線が常に超満員のため、参列できるかわからないが、まずは、どの駅で降り、どこを訪ねればよいか教えてほしいと記す。戦後の鉄道は、昭和23年頃まで主要路線の旅客輸送が定員の3倍から4倍の過密状態であったという(国土交通省ウェブサイト「日本鉄道史」参照)。なお、10月13日、藻谷銀河の追悼歌会は富山市西別院で開催されたが、川田は参列していない(『高志人』第11巻第11号、昭和21年11月)。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
11	後期-1 後期-2	紙本墨書	川田順	「大鷲の」	本文「大鷲のおりかくるひしむかつやま 龍王岳はいや高く見ゆ 順」。『鷲』(創元社、1940年)所収の「立山行」54首のうち「鷲」10首の1首。	当館蔵
12	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「賀正つくなひを」(昭和22年1月1日付)	宛先・本文墨筆、差出ペン書き。北白川から、荒町高志人社宛て。年賀状。短歌「つくなひを未だ足らずと省みて寒き初日の光にむかふ」が記されている。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
13	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「冠省春寒なほ去らず」(3月25日付)	消印不鮮明。宛先墨筆、差出・本文ペン書き。北白川から、荒町高志人社宛て。日本画家の石崎光瑠の訃報を伝える。「三度目の脳溢血にて今朝六時半長逝致され候。實に残念至極に候。高野山金剛峯寺の襖画遂に未完成に了り候」と記す。石崎は昭和22年3月25日逝去。川田は、昭和18年10月5日、京都の「鶴屋」での会食の際に、翁を介して、翁と同郷の石崎と初めて会った(翁久允「愛國歌人川田順先生を訪ふ」『高志人』第8巻第11号、昭和18年11月)。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
14	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「高志人毎号忝く」(昭和25年11月16日消印)	墨筆。差出「神奈川縣国府津町」、宛先「富山市新桜町観光会館内高志人社」。『高志人』受け取りの礼状。翁久允「平和?自由?」(『高志人』第15巻第11号、昭和25年11月)について、「何人も貴兄ならでは斯く正直に公言し得ず」と記し、「十字軍に加はることを許されず我等のいのち全けからむか」と短歌を記す。葉書には川田自身による水仙の彩色画が添えられ、「掬泉居」の落款がある。翁は『高志人』を継続して川田に送っていた。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
15	後期-2	雑誌	-	『高志人』第15巻第11号(昭和25年11月)	巻頭に、翁久允「平和?自由?」を掲載。本文末尾に、「今日の世界は自由と平和を偶像化しようとする印刷文化時代だ」と記し、「高遠なる理想が偶像化されたら、それは如何に高遠であつても、そして如何に真らしく説法されても、更らに如何に美はしく塗りたてられても、何の値もないものになるのである。やがて自由・平和への十字軍と称するものが第三次大戦の火蓋をきることが明らかである」と結ぶ。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
16	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「玉葉及高志人忝く」(昭和30年3月17日消印)	宛先・本文墨筆、差出スタンプ。差出「神奈川縣藤澤市辻堂」、宛先「富山市安野屋町(略)高志人社」。『高志人』受け取りの礼状。「一度又錦地へとお誘ひ難有存じますが、今のところなかなか遠出ができません」と、富山訪問は難しいと返信する。川田自筆の梅の彩色画が添えられている。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
17	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「高志人四月号忝く拝受」(昭和37年4月8日消印)	墨筆、差出ペン書き。辻堂から、安野屋町宛て。『高志人』受け取りの礼状。「第十回の三尊道舎祭を遥拝致します」とあり、「三尊に帰依の仏心持たずしてわれは翁になりけるかな 釈迦誕生会の日」と短歌を記している。翁久允は、昭和25年12月に、住居と活動の拠点として安野屋町に建設中の三尊堂に転居した。昭和27年4月、宗教法人三尊道舎設立を『高志人』誌上において発表、毎年4月8日に三尊道舎祭を開催した。	翁久允旧蔵 (個人蔵)
18	後期-2	書簡	川田順	翁久允宛葉書「玉葉拝受 贈られし」(昭和37年4月24日消印)	墨筆、差出ペン書き。辻堂から、安野屋町宛て。「贈られし神通川の鱒ずしは夫婦の腹にも友の腹にも」と短歌が記されている。	翁久允旧蔵 (個人蔵)

19	後期-1 後期-2	書簡	翁久允、 小又幸井、 増田永修	川田順宛封書「二十七日夜」(昭和 29 年 5 月 28 日消印)	<p>巻紙 1 枚、封筒 1 枚。本文中、翁久允による立山の画と「立山はあらかき岩山」の 1 首(『鶯』所収)が墨書されている。小又幸井が、神奈川県藤沢市辻堂の川田順邸を訪問した際の思い出を、翁久允、増田永修とともに語り合った、その折の寄せ書き。川田は辻堂の自邸を「沙上亭」と名づけ、夫人の川田俊子(鈴鹿俊子)とともに、亡くなるまで暮らした。小又の寄せ書きには、沙上亭からの江島の遠景や大島がかすかに見えるさま、盃を傾け語りあったことなどを、翁と増田に話していることが記される。翁は、川田の暮らしぶりが想像されると記し、昭和 18 年に大川寺公園に建立した歌碑再訪への希望を綴る。増田は、藤園女子学園の創立者。「みんなでお待ちしてゐます」と記す。川田は戦後、富山を訪れることはなかったが書簡による交友は終生続いた。</p> <p>なお、この書簡は、平成 2 年(1990)、小又幸井の逝去に際し、当時富山県歌人連盟副会長であった久泉迪雄に、交友のあった鈴鹿俊子より譲られたもの。川田夫妻が大切にしてきたが、富山の文人たちとの長年にわたる親交が富山の地において伝えられるよう譲られたという。平成 24 年(2012)、高志の国文学館開館に先立ち、久泉迪雄氏より寄贈を受けた。</p>	当館蔵
----	--------------	----	-----------------------	-----------------------------------	--	-----

[謝辞]本展示及び展示解説の作成に際し、格別のご高配を賜りました須田満氏をはじめ関係各位に深謝申し上げます。

[参考文献]逸見久美、須田満編『翁久允年譜 1888—1973 第三版』公益財団法人翁久允財団 2020 年